日々連続する保育の反省

柴崎ふさ子

長い夏休みも終わり、二学期が始まる九月のはじめ、私は期待と不安の入り混じった気持で保育室へ向かう。夏休みの間に、子どもたちがどんなに成長しただろうか。一学期と同じように元気な顔で「おはよう」といって来るだろうか、と心配している。それもつかの間「おはようございます」と久しぶりの再会を喜び、あの明るい子どもらしい表情で、次々と登園してくる。

「ぼくねえー、今どうしてここにいるか」

「あら、ほんとね。Hちゃんここにいるわね。でもどうしてって、わからないな。」

「おばあちゃんちにいないからです。」

夏休みの間の経験を、先生の知らない間のでき事を伝えたいという子どもの気持を、ほほえましく受けとめながら、子どもと会話をかわす。そして気がついてみると、全員が部屋に入り、したくをしている。

私が特別に気になっていたのは、T子のことであった。T子は一学期の間、時には「いやー」と激しく泣いて幼稚園に来れなかったり、テラスの所でじっとしていて抱きかかえなければ部屋に入ることができなかったり、又私の様子をうかがいながら、三十分もかかってやっと部屋に入ってきたりの毎日であった。私は、ちょっとしたことでおびえたように泣くT子を、片手に抱きかかえながら、三十五名の入園したての子どもたちと過ごしていた。そのT子がいつの間にか、みんなといっしょに部屋に入り自分のしたくをしている。そういえば、数人ずつ「せんせい、おはよう」といってくる子どもたちといっしょに、私は「Tちゃん、おはよう」と他の誰に

でもするように、言葉をかけたかもしれない。その後は、私がそのようにして、T子が登園してきたことを暖かくうけとめさえすれば、何の抵抗もなく部屋に入ってしたくをし、元気に外へとびだして遊ぶ姿がみられるようになった。

T子の中に、このような変化がどのようにして起ったのだろうか。四十日間の夏休みの間に、T子が成長したといってしまえば、それですむかもしれないが、それにしてもそんなに大きく変われるものだろうか。もし一学期のように、連続する日々が続いていたらどうであっただろうか。変化の仕方が違っていたかもしれない。毎日幼稚園に来ることに対して、夏休みという不連続の時間を過ごしたことは、T子にとって大きな意味があったと思う。

T子の夏休みの間の変化を少しでも探りたいと思い、母親に「夏休みの間に何か変わったことはなかったですか」とたずねてみた。すると母親にとっても、T子の変化は何故だろうと思う程大きかったらしく、T子自身に「二学期になったら、どうして泣かないでいかれるようになったの。」と聞いてみたということであった。何とその答えが、休みの間に『考えた』ということだった。幼いT子が『考えた』と表現したものは、自力で考えたことではあろうが、考えてそれが実行できるだけの力が、それまでに育っていたからに違いない。夏休み前に母親と話し合いをした。その時には、どうしていいかわからず涙を流していた母親だった。しかし夏休みの間に、母親がどれだけT子のことを考え、T子に今必要な体験をさせてあげ、T子とともに楽しく過したかがうかがいしれた。

T子は、もともと現実を逃避するような子どもではない。いろいろな活動にも「やりたい」という気持が人一倍強くありながら、一歩足を踏み出すことができないために、きっかけがつかめないでくずれてしまう。一歩足を踏み出すためのエネルギー、これが育ってくれば、T子は意欲がある明るい、しかもとても繊細な感覚をもった子どもになってくれるだろう。

一学期の間、泣きながら、私に抱かれていたT子は、母親や先生、時々送ってくる近所のおばさんたちが、どれほど大変な思いをしているか、ひしひしと感じていたに違いない。しかし泣かないで幼稚園に来るというきっかけがつかめなかったのかもしれない。それが夏休みの間に『考えた』と表現されているが、二学期からは「やめよう」というひとつの決心を、子どもなりに夏休みがあったからこそできたのではないだろうか。

逆に日々連続する保育が続いている時には、保育者自身も、子どもを押し出してあげるきっかけをつかめないでいることが多いのではないかと反省させられる。もうその子どもが充分に力を貯えた時に、その子どもが一歩飛び立てるように保育者がきっかけをつくってあげなくてはならないのではないかと考えさせられた。

（茨城・竹園幼稚園）

おどりのなかの連続・不連続

石黒節子

第五回の舞踊公演〝桜雲〟を終えて、早や一週間たつ、そのときお祝いに頂いたあんなに美しかった色とりどりのバラの花が、日に日に色を変え、その美しさを失っていく淋しさが私は好きだ。ひとつのことが終り、過ぎ去っていくのをはっきりと感じとることができるからだ。そんな私が、昨春、桜に心をとらえられて、その思いを舞踊にしようとする過程で、まず、目にしたものは、梶井基次郎の「桜の樹の下には」と坂口安吾の「桜